

体育会所属大学生の学生生活と進路形成に関する実証的研究

ーラグビー部とアメリカンフットボール部を事例にー

西島 央 (首都大学東京)

＜１＞本研究の目的とその背景

本報告は、関東圏の大学のラグビー部とアメリカンフットボール部（以下、アメフトと表記）に所属する学生を対象に行った質問紙調査から、「体育会所属学生」の学生生活と進路形成の特徴と課題に関して、教育社会的な視点から考察することを目的とする。

一般に「体育会所属学生は就職がいい」などと言われるが、それは本当だろうか。

私たちが「体育会」と言うとき、そこでイメージしているのは、テレビや新聞等で試合結果が報道される、東京六大学野球やラグビー等のメジャー競技種目の大学選手権大会に出場している大学のチームや選手たちではないだろうか。そのイメージからなら、たしかに「有名大学に通っていてスポーツもできるなら、就職がよくても当たり前だ」と納得してしまいそうになる。

しかし、実際には、大学にさまざまな学部や入試難易度の違い、伝統や校風の違いがあるように、体育会にも強い部や弱い部、メジャー競技種目やマイナー競技種目があり、また全国レベルで注目される試合に出場する選手もいれば、強豪チームに所属していても一度も試合に出場したことの無い選手や、試合結果が報道されることの無い下部リーグで試合に出場している選手もいるというように、体育会所属学生は一枚岩的に捉えられるものではないはずだ。

そのように多様な様相を呈する体育会所属学生の学生生活と進路形成の特徴や課題を明らかにするにあたって参考とすべき高等教育の先行研究では、学生生活や進路形成に関する調査研究が数多くみられる。しかしながら、その多くが、学部や入試難易度や伝統の違い等に注目した調査研究であり、体育会活動に注目した研究は、管見のかぎり非常に少ない。まれに見かけるものも、「体育会」または「部・サークル」への所属の有無程度の括りで、体育会活動やサークル活動が学生生活や進路形成に与える効果を論じる程度に留まっている。

そのため、上述したような体育会の多様な様相をふまえていることはなく、また広く大学生調査として行っているため、体育会所属学生を一定規模で捉えることもできていない。結果として、体育会活動の何がどのような理由でどの

ような効果をもつのかを検証できてきたとは言えないのである。（たとえば、武内編 2003、梅崎 2004、松繁 2005 など）

体育会所属学生はこれまで、実感として一般の大学生より学生生活が充実しているように見えたり、就職がよいように思われたりしていたことは否めない。だから研究の俎上に載せなくてもよかったかもしれない。しかし、大学生の就職難の状況が続き、大学生の学力や卒業後の進路に対する大学教育のレリバンスが社会的に問われるようになってきた昨今、体育会所属学生ばかりが以前と変わらない状況にあり続けられているわけではない。練習時間帯を授業時間帯とずらして、授業に出席することが求められるようになったり、競技団体レベルで所属大学生の就職をサポートする取り組みをしたりするケースがみられるようになってきている。

このような現状をふまえたとき、多様な様相を呈する体育会所属学生の学生生活と進路形成についても、その特徴と課題を明らかにし、課題解決に資する調査研究が求められよう。

また、報告者を含む研究グループは、これまで中等教育段階の部活動に注目して、その学校生活や進路形成に果たす役割や課題などを明らかにしてきた。大学の体育会活動にも、中等教育段階の部活動と同様の役割や課題があるのか、または異なる特徴や課題があるのかを明らかにすることは、中等教育段階の学校生活で学業と並んで大きな比重を占める部活動の意義やあり方を考えていくうえでも重要な意味がある。

以上のような問題関心から、体育会所属学生の多様な様相を捉えることを企図した質問紙調査を実施した。

＜２＞調査の概要

体育会所属学生は、特定の学部や入試難易度の学生を捉えるように簡単には捕捉できない。また、競技特性や部の特性に大きく左右されてしまう。そこで、特徴を捉えやすくするために、i. 基本的に男性のみの競技種目、ii. 大学の体育会に所属することが競技キャリアとして重要な競技種目の２点で条件を絞り、ラグビー部とアメフト部を調査対象とした。

日本ラグビー協会と関東学生アメリカンフット

ボール連盟の協力を得て、下記の要領で、質問紙調査を実施した。

①調査対象：ラグビー部は、関東大学リーグ戦グループに所属する私立大学。アメフト部は、関東学生アメリカンフットボール連盟に所属する私立大学。リーグの上位、中位、下位でチームのレベルを3分類し、各レベルから1年生と4年生各100人程度をサンプルに設定できるように大学を選んだ。

②調査期間：当初2011年11月24日から2012年1月19日までを調査期間としたが、オフシーズン明けまで期間を延長した。

③調査方法：ラグビー部は各大学の主務宛に郵送、アメフト部は連盟の会議日に主務に手渡しし、いずれも郵送で回収した。

④配布数と回収率：ラグビー部は配布数781票（30校）で回収数379票（15校）、回収率48.5%。アメフト部は配布数808票（36校）で回収数484票（29校）、回収率59.9%。

<3>主な調査結果

体育会所属学生に限定した調査研究がこれまでほとんどなかったことから、本報告では、記述的に彼らの学生生活と進路形成の多様な様相を描きながら、教育社会学の視点から捉えられる特徴や課題を示していくことにしたい。

①同競技経験

高校までに同競技を経験していない割合は、ラグビー＝5.6%に対してアメフト＝48.6%と、ラグビー部の方が高校までの同競技経験がはるかに高い。これは、高校までの部活動数の違いを反映しているものと考えられる。また、レベル別にも同競技経験に大きな差がみられた。

②入学方法

入学方法を一般入試とスポーツ・体育推薦に絞って示すと、次のとおりである。

一般入試：ラグビー上位＝5.6%、ラグビー中位＝2.9%、ラグビー下位＝16.9%、アメフト上位＝18.9%、アメフト中位＝34.9%、アメフト下位＝54.6%。

スポーツ・体育推薦：ラグビー上位＝52.3%、ラグビー中位＝81.6%、ラグビー下位＝39.0%、アメフト上位＝52.0%、アメフト中位＝38.8%、アメフト下位＝3.8%。

競技種目による違いとレベルによる違いがみられるが、ラグビーでは下位レベルの大学でもスポーツ・体育推薦が大きな割合を占めていることに注目できる。

③授業への関わり

授業への出席率は、入学方法やレベルによる違いはあまりみられない。しかし、「授業についていけている」かどうか尋ねたところ、ラグビー、アメフトともに、肯定的な回答の割合は、一般入試の学生よりスポーツ・体育推薦の学生の方が20ポイントほど少なかった。

④体育会活動への関わり

練習日数は、レベルによってやや異なる他、練習参加率にもばらつきがみられる。ラグビー、アメフトともに中位レベルの参加率が高かったが、これは学校による違いと思われる。

4年生の公式戦出場状況をみると、ラグビーよりアメフトの方が試合に出場している割合が高い。スポーツ・体育推薦の学生で何試合かの交代出場または出場無しに留まるのは、ラグビーでは3分の2に上るだが、アメフトでは2割に留まる。部員数やレギュラーポジション数の違いを反映していると思われる。

⑤卒業後の進路（4年生のみ）

卒業後も、選手として同競技を続けたいと考えているのは、ラグビー上位で3割、アメフト上位で2割に留まる。調査時点の卒業後の進路をみると、留年や未定が3割近くに上り、民間企業への内定が、部のレベルや入学方法によって多少違いがあるが5～6割程度である。

⑥就職活動に対する評価（4年生のみ）

民間企業に内定している学生にのみ、就職活動に対する評価を尋ねたところ、企業の同競技部のスカウトによって内定を得た割合がラグビー上位＝32.7%、アメフト上位＝16.7%だった。

ただ、内定を得るうえで体育会の活動が決め手になったかどうかについては、ラグビーでは試合出場の低いほど、アメフトでは高いほど評価されたと考えている。

より詳細なデータと分析・考察については、当日の資料にて提示する。

（主要参考文献）

松繁寿和 2005 「体育会系の能力」『日本労働研究雑誌』537。

武内清編 2003 『キャンパスライフの今』玉川大学出版部。

梅崎修 2004 「成績・クラブ活動と就職—新規大卒就職市場におけるOBネットワークの利用」『大学教育効果の実証分析』日本評論社。

※本報告は、平成20～23年度科学研究費補助金「中等教育における部活動指導の実態と、教科、進路指導への効果に関する臨床教育学的研究」の研究成果の一部である。